

お天気祭の珍しい神饌

2月に行われる小鹿野町両神薄出原の諏訪神社の大祭では、桃の弓で的を射て、その年の天気を占う神事が行われます。当たったのが的の白い部分なら晴れ、黒い部分なら雨、外れは強風といいます。

神饌は、しとぎ餅という、米の粉・大豆の粉を練って整形し、加熱しない重ね餅で、神事が終わると、村人が持ち寄った、もっと大きなしとぎ餅を切り分けて、参詣者に振る舞います。たいへん起源の古い神饌で、県内では、ここにしか残されていません。



自家製のしとぎ餅を振舞う人

伝統食の起源

正月棚は、穀霊となって正月にやってくる古い御先祖様を祀る特設の棚で、鏡餅・御神酒・雑煮などを供えるほか、橙・福鱒・栗・吊るし柿・昆布などの縁起の良い供物を吊り下げます。これらは小正月に、下して家族で頂きます。



正月棚とそこから下げられた供物

盆棚は、お盆に帰ってくる御先祖様を迎える臨時の施設です。お盆の期間中、三度三度の食事を供え、家族も同じものを頂きます。長瀨町

風布の大野家では、小豆と金胡麻の2種類のぼた餅を15日のお昼に、手打ちうどんを夕食にお供えています。高級なものを買って供えるよりも、子供が手作りのものをお供えることを御先祖は喜んでくれるとのことでした。



盆棚に供えられたぼた餅と畑の作物

下の写真は、小鹿野町両神薄西平の天王様にお供えるネジと呼ばれる珍しい神饌です。旧暦の6月14日前後（新暦7月中旬）に、疫病退散を願って、天王様にお供えます。祈願が終わると、ネジを下げて宿に戻り、直会が終わるとネジを1個ずつ持ち帰り、神棚に供えた後、下げて家族で食べます。



しょうぎに載せて供えるねじ

これらの例から、神仏にお供えした御馳走を下げて、家族やムラの仲間と一緒に頂くのが、伝統食の起源といってよいのではないのでしょうか。

会期：9月17日（土）～11月20日（日）

会場：埼玉県立川の博物館第2展示室

（わかまつ りょういち・学芸主幹）